

# アトム

## 登場人物

### 昭和38年（1963年）

1. 中塚大作
2. 朝永慎司
3. 中川千夏
4. 神田正太郎
5. 中塚佐知子

### 平成25年（2013年）

6. 清水富士雄(大作との二役)
7. 山野亜希
8. 村上晴美
9. 毛塚マリ

## プロローグ

10. 少女
11. 何者か

## ◆プロローグ

暗闇の中、何者か達がうごめいている。

何者か達は懐中電灯のライトを自分の顔に当てる。

暗闇の中に、浮かび上がる顔、顔、顔。

何者か達の声が、木霊のように響く。

何者か達（ばらばらに）誰か、アトムについて知らないか。

何者か達がうごめく。

何者か達（ばらばらに）誰か、アトムについて知らないか。

舞台下で一人の少年が立ち上がる。

少年の名前は清水富士雄。

富士雄 あの一、僕でよければ

何者か達は一斉にその少年に懐中電灯のライトを当てる。

何者か達 お前が誰だ！

富士雄 僕は七つ森東中学校三年・清水富士雄。みんなからは、オタクの富士雄って呼ばれてる。

何者か達 オタクの富士雄！

富士雄 僕、漫画オタクなんだ。特に最近はおトムオタクになっちゃって。

何者か達の中から一人の少女が現れる。

富士雄 君は？(そう言って富士雄は舞台に上がる。)

少女 私は阿藤睦美。よろしくね。

富士雄 よろしく。

少女 アトムについて教えて。

富士雄 いいよ、アトムは『鉄腕アトム』っていう漫画の主人公のロボットさ。

何者か達 (一斉に) ロボット！

富士雄 そう、十万馬力のロボットなんだ。

何者か達 (一斉に) 十万馬力！

少女 アトムってすごいね。アトムっていつ生まれたの。

富士雄 原作とテレビアニメでは違うんだ。原作の漫画ではアトムの誕生は二〇〇三年。でもテレビアニメではその十年後の二〇一三年。

少女 どっちがアトムの本当の誕生日なの？

富士雄 どっちなのかな。

少女 アトムっていう名前にはどんな意味があるの？

富士雄 アトムは原子の英語さ。

少女 原子？

何者か達はスマートフォンのようなものを取り出し、「原子」という言葉をつぶや

きながら、原子について調べる。少女がその一つを手にとって。

少女 原子、ものの最小単位。

何者か1 水素

何者か2 ヘリウム

何者か3 酸素

何者か4 炭素

富士雄 そう、それぞれ。

何者か1 金

何者か2 銀

何者か3 銅

何者か4 鉛

何者か1 ラドン

何者か2 セシウム

何者か3 コバルト

何者か4 プルトニウム

少女 ウラン

富士雄 (あつ) ウランはアトムの妹だよ。

少女 ここにはウランは九二番目の原子って書いてあるわ。

富士雄 でもアトムは妹でもあるんだ。

何者か達 アトムは妹…

富士雄 ウランはテレビ漫画では第三七話で、アトムへの誕生日プレゼントとして送られるんだ。

少女 アトムに弱点はあるの？

富士雄 弱点？

少女 ねっ、アトムの弱点を教えて？

富士雄 弱点か。そうだな、エネルギーが切れちゃうことかな。

少女 アトムのエネルギーは何なの？

富士雄 原子力。

何者か達 原子力？

富士雄 アトムは原子力エネルギーが切れると動けなくなっちゃうんだ。でも…

少女 でも？

富士雄 一番の弱点は優しすぎる場所かな。アトムは人間を守るんだ。たとえ自分の身を犠牲にしても。

少女 ありがとう。おかげでアトムのことがよくわかったわ。

ここで突然少女は笑い出す。

何者か達も笑い出す。

富士雄はびっくりして倒れる。

何者か達と少女が富士雄の周りに集まってくる。

少女・何者か達 これでアトムに復讐ができる！

富士雄 復讐だって、

少女 人間に総攻撃をかけようとした私の仲間よ、

何者か達 みんな死んでしまった！アトムに殺された！

少女 たった一人の生き残りが死ぬ直前にこう言ったわ。

何者か達 アトムに気をつけろ！

少女 だから、私達はあなたの心の中に入ってアトムを調べることにしたの。

富士雄 心の中に。

少女 そう、ここはあなたの、

何者か達 心の中！

少女 私達は、人の心の中に入り込み、人の心を操ることができるの。

富士雄 そうか、君達は『鉄腕アトム』第二十話に登場した気体人間だね。

少女 今頃わかったの？でも、

何者か達、もう遅い！

少女 あなたの心は、私達

何者か達 気体人間が支配した！

少女 アトムもあなたの心の中までは助けに来られないでしょ。

富士雄 (立ち上がって) 君は、大きな間違いをしている。アトムは僕らの心の中に生き続けているんだ。

少女 …

富士雄 耳を澄ませば聞こえてくる、あの歌が。目を見張れば見えてくる、あの姿が。そしてアトムは僕の心の中に飛んでくる、あのメロディーと共に。

『鉄腕アトム』のテーマ曲がかかる。

何者か達は舞台からいなくなる。

テーマ曲の中で次の舞台が準備される。

■ 1

★平成 25 年（2013 年）12 月のある日 15:00

舞台が明るくなる。

そこは平成二五年（二〇一三年）の七つ森東中学校の生徒会室。

舞台下手側が黒板がある側であり、上手側は生徒会室の後ろ。奥は廊下側。客席側には窓があり、その向こうは校庭、そして校庭の向こうには七つ森が広がっている。

実際は窓は設置されないが、そこに窓があるという設定で劇は進行していく。生徒会室の窓の下には長机が壁につけられた形で並べて置かれている。また生徒会室の中央には会議用のテーブルが置かれていて、その周りには椅子が置かれている。

生徒会室には山野亜希と清水富士雄の二人がいる。

亜希は机に向かって作業をしている。

富士雄は居眠りをしている。

富士雄が目を覚ます。そして、メガネをかけてあたりを見渡す。

富士雄が立ち上がって窓から空を眺める。

亜希 富士雄、どうしたの？

富士雄 (あー)アトム飛んでないやなって。

亜希 アトム？

富士雄 このところずっとアトムばかり読んでたせいで、夢に出てくるんだ。

亜希 夢にまで出てくるんだ。

富士雄 あっ、(空を指さして)アトム。

亜希が富士雄が指をさしたところを見る。

富士雄 なんてね。

富士雄と亜希が笑う。

毛塚マリが慌てて生徒会室に入ってくる。

マリ ごめーん。

亜希 それでは七つ森東中学校五十周年記念祝賀会についての第五回実行委員会を始めます。今日の議題は、前回の話し合いで決まった、実行委員会企画の出し物について、具体的に話を進めることです。

マリ 亜希。晴美は？

亜希 校長室で写真の探索をしてもらってる。

マリ 写真？それって何に使うの？あー、ごめん。あたし、前回休んじゃったんでよくわかってないから、前回決まったこと教えてくれる？

亜希 出し物なんだけど、この学校の歴史を写真を使って紹介することになったんだ。でもただ写真を映すだけじゃつまらないんで、映された写真についてこの学校の校舎に語ってもらうんだけど。

マリ どんなふうに？

富士雄 (年寄りの魔法使いのようなしわがれた声で) 私は、七つ森東中学校の校舎だ。これから私がこの目で見てきたことを、みなさんに紹介しよう。

マリ なるほどね。

亜希 まずは今年の紹介から始まるの。で、だんだん時をさかのぼって、最後にこの学校が生まれた五十年前を紹介するのね。前回決まったのはそこまで。で、今日は具体的な話になるんだけど、富士雄と、校長室で過去のアレキサンダーとか探したら、ちょっと面白いものを見つけちゃったんだ。(文集を出して)

マリ 何それ？

亜希 第一回卒業生の卒業文集。この中にこの代の生徒達が演じた劇の台本が載ってたんだ。開校記念の会で劇を上演したって書いてある。でね、その劇の題名が『アトム』なんだ。

マリ 亜希、『アトム』ってどんな話なの？

亜希 五十年後の未来から、悪の一味がこの七つ森東中学校にタイムマシンでやってくるの。

マリ 悪の一味が？

亜希 そう、彼らの目的って何だと思う？

マリ えっ？

亜希 彼らの目的は、慎司の命を奪うこと。

マリ 慎司って？

亜希 生徒会の副会長。でも慎司は五十年後にすごい科学者になってるんだ。

富士雄 慎司は五十年後の未来でアトムを本当に創っちゃうんだ。

亜希 悪の一味はそのアトムにこてんぱんにやられちゃうのね。で、悪の一味は考えた。

富士雄 「そうだ、タイムマシンで五十年前に行って、少年時代の慎司を亡き者にしよう。そうすればアトムは生まれよう」

マリ なるほど。

亜希 そしてタイムマシンを使って五十年前に行くんだけど、それを知った科学者・慎司は五十年前の自分を守るために、タイムマシンを使ってアトムを五十年前に送るの。

富士雄 アトムは生徒会のメンバーの千夏、大作、正太郎そして将来科学者になる慎司と力を合わせて悪の一味をやっつけるんだ。

マリ (あー) そういえば、なんか同じような話、映画であったよね。あれ、何だったっけ？

亜希 ターミネーターかな。

マリ そう、それ。五十年前にターミネーターみたいな話聞いたんだ。

亜希 それで提案なんだけど、五十年前の紹介の中で私達実行委員がこの『アトム』を上演するってどう？

マリ いいね。で、どんな感じになるの、その劇って？

亜希 富士雄、二人で読んでみよ、『アトム』のクライマックス。

富士雄 いいけど。

亜希が富士雄に台本のコピーを渡す。

亜希 それじゃここからお願い。富士雄は悪人とアトムをやって。私は千夏をやるから。

富士雄 わかった。「(悪人)昭和三八年の生徒会の諸君、われわれは五十年後の未来から来たのさ」

亜希 「(千夏)五十年後の未来ですって」

富士雄 「(悪人)そうだ、君は千夏といったね、五十年後に君の友だちの慎司くんがとんでもないものを創ってね、われわれはそいつに苦しめられているんだ」

亜希 「(千夏)慎司は何を創ったの？」

富士雄 「(悪人)アトムだ」

亜希 「(千夏)アトム？」

富士雄 「(悪人)十万馬力のアトムを倒すのは簡単ではない。それで、われわれはタイムマシンを使って五十年前にやってきた。ここでアトムを創る前の慎司を亡き者にするために」

亜希 「(千夏)なんですって。みんな、いい？みんなで戦いましょう。私達の未来のために」

富士雄 「(悪人)われわれと戦うだと。わあははは、愚かな奴らだ」

亜希 「(ト書き)その時、突然、光が教室を包む」

富士雄 「(悪人)うわー、何だ、この光は！」

亜希 「(ト書き)その光の中から一人の少年が現れる」

富士雄が一人二役で少年と悪人を演じる。

富士雄 「(少年)悪者達、ぼくが相手だ」

「(悪人)お前誰だ？」

「(少年)僕は、五十年後の未来から君達を追ってやってきた」

五十年前に大ヒットした『恋のバカンス』(ザ・ピーナッツ) I N。

富士雄 「(悪者)おのれー。やっちまえ」

少年と悪者達の戦いを富士生が一人二役で演じる。

最後に少年が悪者達をやっつける。

暗転

☆昭和 38 年（1963 年）11 月 5 日(火) 15:00

舞台が明るくなる。

そこは昭和三八年（一九六三年）の七つ森東中学校の生徒会室。

そこに朝永慎司と中川千夏の二人がいる。

千夏は台本を読んでいる。慎司は千夏を見つめている。

千夏 慎司。この続きどうなるの？

慎司 気になる？

千夏 うん、とっても。ねっ、この後どうなるのか教えてよ。

慎司 五十年後の未来から来た少年は、もう誰だかわかるよね。

千夏 アトムなんですよ。

慎司 そう、アトムは生徒会の四人にだけ自分が五十年後から来たことを話すんだ。びっくりした四人は、五十年後の未来について次々とアトムに尋ねる。

千夏 例えば？

慎司 そこなんだ、そこで詰まっちゃってるんだ。千夏だったらどんなこと聞く？

千夏 五十年後か…

慎司 自分がどうなっているかとか知りたくない？

千夏 (ん…)それは、知りたくないかな。もし知っちゃったらつまらないもん。

慎司 そっか。

小学校一年生の中塚佐知子が生徒会室の入り口に立っている。

佐知子 千夏おねえちゃん。

千夏 (手を振って) サツちゃん。

佐知子 おいちゃんは？



千夏 もうすぐ来るんじゃないかな。

佐知子 うん。(あっ)千夏おねえちゃん、今日もおねえちゃんのところにアトム見に行ってもいい？

千夏 そのつもりだけど。

佐知子 今日のアトムは『クレオパトラの首飾り』だよ。

千夏 楽しみだね。サッチちゃん。

佐知子 うん。

そこに中塚大作と神田正太郎が入ってくる。大作は眼鏡をかけていないこと以外は、富士雄と瓜二つである。

佐知子 おいちゃん。

大作 おっ、サチ、もう来てたか。(慎司を見て) 慎司、俺の勝ちだな。俺と正太郎が玉屋でラムネ一本おごれよな。

正太郎 大ちゃん、僕もいよ。

大作 正太郎、約束は約束だ。おごってもらえよ。俺達が応援した巨人が日本シリーズで優勝したんだから。

慎司、西鉄、残念だったな。まさか最終戦で十八点も取られるとはね。

正太郎 稲尾が最終戦であんなに打たれちゃうなんてびっくりだよ、第六戦じゃ巨人を完封したのに。

大作 俺が小学校の時の巨人対西鉄の日本シリーズじゃ、巨人が三勝した後、西鉄の稲尾が投げ続けて、四連勝して優勝しただろ。

正太郎 あったね、そんなこと。「神様、仏様、稲尾様」って。

大作 今回は、あの借りを返したって感じだよな。

正太郎 でも、稲尾、どうしちゃったんだろうね。

慎司 投げすぎなんだよ。あんなに毎日投げちやつられるよ。稲尾は神様でも、仏様でもない、それにロボットでもないんだから。

大作 そんなのあたり前田のクラッカーじゃん。

慎司 大作、おまえもし五十年後の未来からアトムが来たら、アトムにどんなこと聞く。

大作 突然可だよ。

千夏 台本の参考にしたいんだって。

大作 うーん。(考えてる)

千夏 じゃ、私がアトムをやるから、答えてよ。

大作 千夏が？よし、やってくれ。

千夏 「僕はアトム、五十年後の未来からやって来た」

大作 「シェー」(ポーズをして)

千夏 ちょっと大作、ちゃんと最後まで言わせてよ。

大作 わりーわりー。

千夏 「僕はアトム、五十年後の未来からやって来た。大作くん五十年後の未来について何か知りたいことはないかい？」

大作 「玉屋ではまだラムネを売ってるかい？」

千夏 大作、せっかく未来からアトムが来たのにラムネのことなんか聞いてどうするの。次、正太郎、「正太郎くん、五十年後の未来について、何か知りたいことはないかい？」

正太郎 えーと、えっとねー。そうだ、「どのチームが日本シリーズで優勝するの？」

大作 (ドスのきいた声で)「ふふふ、お答えしよう、五十年後の日本シリーズで優勝するのは、巨人だ」

正太郎 五十年後も、巨人なんだ。

大作 (ドスのきいた声で)「あつたり前田のクラッカー」

正太郎 今年活躍した長島とか王とか稲尾って五十年後どうなってるかな？

慎司 選手は無理だろうな七十超えちゃうから。

正太郎 監督とかやってないかな。五十年後の日本シリーズ、巨人の監督が長島、西鉄の監督が稲尾なんてね。

慎司 あー、それかもしれないな。正太郎の案、採用だ。質問の一つは日本シリーズにしよう。

正太郎 やったー。

慎司 五十年後の日本シリーズ、巨人対西鉄。優勝するのは西鉄ライオンズ。

大作 何で西鉄なんだよ。

慎司 台本創るのは俺だから。俺が好きなチームが勝つの、当然だろ。

大作 ずりーよ、それ。

慎司 それじゃ大作、お前が書けよ。

大作 俺が？俺に書けるわけねーだろ。

慎司 じゃ、つべこべ言わないで質問考えろよ。

正太郎 (手を挙げて)はい。「五十年後はどんな歌が流行っていますか？」

慎司 どんな歌か、それ考えて答えるの難しいな。

正太郎 それじゃ、「五十年後は五十年前のどの歌がまた歌われていますか」って質問ならどう？

大作 『高校三年生』！「♪あああああ 高校三年生♪」

千夏 『上を向いて歩こう』なんてどうかね。今年、アメリカでも大ヒットしたよね。タイトルは『スキヤキ』だけど。

大作 でもあれ何で『スキヤキ』なんだ、歌の中にスキヤキなんて出てこないじゃん。

千夏 ねっ、サッチャンは、どう思う？

佐知子 サチ、スキヤキ好きだよ。

千夏 (あっ)そうじゃなくって、サッチャンはどんな歌がずっとずっと歌われると思う。

佐知子 (少し考えて)『鉄腕アトム』。

千夏 アトムか。

佐知子 でね、五十年後は本物のアトムとウランちゃんが歌うの。

千夏 サッちゃん、それ面白いね。

佐知子 サチ、ウランちゃんだーい好き。

千夏 アトムよかったね。先週の放送でお茶の水博士からウランちゃんプレゼントされて。

佐知子 うん。

ここから佐知子がお絵かき帳のようなものに、何か絵を描き出す。

正太郎 五十年後も紅白歌合戦ってあるのかね。

大作 そりゃあるよ、紅白は不滅だよ。

千夏 私、坂本九って五十年後も紅白に出てる気がする。歌うのは『上を向いて歩こう』。あの歌って、つらい時に歌うと気分がすっとするんだよね。

大作 五十年後に、そんなつらいことが起きるってか。

慎司 第三次世界大戦とか。

千夏 そんなの起こったら困るけど。でも、いつだって、誰にだってつらいことってあるでしょ。五十年後だって、つらいことあるよ。

大作 千夏にもつらいことあるのか？

千夏 あるよ、大ありだよ。

大作 例えば？

千夏 生徒会長になった時。陰でずいぶん言われてたんだ。

大作 何て？

千夏 「女のくせに」って。あーそうだ、アトムに聞いてみようかね。「五十年後は、女が生徒会長になっても『女のくせに』って言われませんか」って。

慎司 五十年後は、生徒会長ってどこ学校でも女がなったりしてな。

大作 そんなのありえねーよ。

千夏 慎司、慎司はどうなの？

慎司 どうって？

千夏 「僕はアトム、五十年後の未来からやって来た。慎司くん、五十年後の未来について何か知りたいことはないかい？」

慎司 「…アトムは生まれますか？」

千夏 目の前のアトムに、「アトムは生まれますか」って聞くんだ？

慎司 おかしいよな。でも、一番知りたいのはそのことなんだ。  
千夏 それでは質問です。五十年後にアトムは生まれるって思う人。

正太郎、大作、佐知子が手を挙げる。

続いて千夏が手を挙げる。

慎司は挙げる。

千夏 慎司、どうして？

慎司 わからないんだ。

千夏 でも、慎司、小学校の卒業文集に、「将来の夢はアトムを創ることです」って書いてたよね。

慎司 アトムを創るのが夢だった時はよかったんだ。でも、あれからロボットについていろいろ調べたら、アトムを創るってそんな簡単なことじゃないってわかったんだ。

佐知子 千夏おねえちゃん。

千夏 何？

佐知子 はい。(そう言って描いた絵を渡す)

千夏 ウランちゃんだね。サツちゃん上手に描けたね。

佐知子 千夏おねえちゃんありがとう。

慎司 ウランか…

千夏 どうしたの？

慎司 何でアトムの妹の名前をウランにしたのかなって。確かにウランはアトムなんだけどさ。

千夏 ウランがアトム？何それ？

慎司 アトムは原子。

千夏 原子？

慎司 理科でやっただろ。この世の中に存在するものって、どんどん小さくしていくと最後に原子になるって。

千夏 あー、やったやった。

慎司 その原子を英語にするとアトム。

大作 正太郎、原子なんて習ったか？

正太郎 大ちゃんごめん。僕覚えてない。

千夏 やったよ、酸素とか炭素とかでしょ。

慎司 そう、それ。で、ウランもその原子の一つなんだ。

千夏 アトムが原子って意味だから、妹はその原子の中のウランにしたんじゃないの。

慎司 でも何でわざわざウランかなって。原子って自然界に九二もあるのに。

大作 例えば？

慎司 そうだな、金とか銀とか。

大作 アトムが金ちゃんか銀ちゃんとかじゃ変だろ。アトムの妹がケガして倒れてるとするだろ。そこにアトムが駆けつけ、妹を抱きかかえて叫ぶ、「しっかり、しっかりするんだ、金ちゃん！」…変だよ。  
慎司、原子って他にどんなのがあるんだよ。

慎司 カルシウム。

大作 「しっかり、しっかりするんだ、カルシウムちゃん！」…これまた変だね。他には？

慎司 ストロニウム。

大作 「しっかり、しっかりするんだ、ストロニウムちゃん！」…更に変、長すぎだね。もっと短いものはないのか？

慎司 …バリウム。

大作 バリウム？アトムの妹がバリウム。「しっかり、しっかりするんだ、バリウムちゃん！」

佐知子 やだ！サチ、アトムの妹がバリウムちゃんじゃやだ！

千夏 サッチャン、わかるよ。バリウムちゃんって、なんか悪魔の娘って感じるもん。やっぱりウランだよ。ウランが一番かっこいい感じがするよ。

慎司 そうだな。

千夏 慎司、台本の続き楽しみにしてるから。

慎司 千夏にそう言われちゃ、頑張るしかないな。

佐知子 慎司はいちちゃん。

慎司 何、サッチャン。

佐知子 慎司はいちちゃんがいるお話で、ウランちゃん出して。

慎司 ウランちゃん？

佐知子 お願い。

慎司 (…うん) わかった。

佐知子 やったー。

千夏 よかったね、サッチャン。

佐知子 うん。

大作 よーし、サチ、帰るぞ。

千夏 サッチャン。いつもと同じ六時に大作はいちちゃんと来て。

佐知子 うん。今日のアトムにウランちゃん出るかな。出るといいな。

大作 それにしてもいいよな、お前らの家にはテレビがあつてさ。俺んちにもテレビがあればな。五十年後には、きっとどこのうちにもテレビあるんだろうな。あー、俺、アトム聞くこと思いついた。「五十年後には、どのうちにもテレビがありますか？」

慎司 俺は、テレビがないお前がうらやましいけどな。

大作 慎司、それイヤミかよ。

慎司 ばーか、本音だよ。だって、お前んとこにはテレビがないから、

大作 何だよ？

慎司 何でもない。大作、テレビのカラー放送はもう始まってるんだぜ。五十年後にはどこのうちにも、白黒じゃなくてカラーのテレビがあるよ。じゃあな。

そう言って慎司が教室から出ていく。

大作 サチ、帰るぞ。正太郎、俺についてこい！

正太郎 大ちゃん、待って、待ってよ。

佐知子 千夏おねえちゃんも、一緒に帰ろ(う)。

千夏 すぐ追いつくから先に行行って。

大作、佐知子、正太郎が教室から出ていく。

千夏が窓の外を見ている。

千夏 五十年後か。

暗転

## ■ 2

★平成 25 年（2013 年）12 月のある日 15:30

舞台が明るくなる。

そこは平成二五年（二〇一三年）の生徒会室。

亜希が窓の外を見ている。

亜希 五十年前か。

マリが台本を読み終える。

亜希 どう、読み終えた？

マリ　すごいね、五十年前にこれ書いたって。これ書いたの、本当に中学生なのか？

亜希　もしそうだとしたら、これ創った生徒って天才だね。

富士雄　僕、これ読んでなんか五十年前の一九六三年に興味持ちちゃって、インターネットでいろいろ調べたんだ。そしたら、今年って五十年前とすっごく繋がってるんだ。

マリ　例えば？

富士雄　日本シリーズで、楽天が優勝したよね。日本シリーズでも活躍した田中が作った連勝記録なんだけど、それまでの連勝記録を持っていたのがこの台本に出てくる稲尾なんだ。

マリ　そうなんだ。

富士雄　この台本は今年の紅白歌合戦のとり、坂本九になってるだろ、実際北島三郎だけど。その北島三郎が紅白にデビューしたの、五十年前なんだ。

マリ　さぶちゃんて、五十年も紅白に出てるんだ。

亜希　もし坂本九が飛行機事故で死ななかったら、本当に今年のとり、坂本九だったかもしれないよね。震災の後『上を向いて歩こう』って、本当によく歌われたじゃない。

富士雄　歌に続くのは流行語。

亜希　流行語？

富士雄　今年は流行語大賞、四つも選ばれたろ。「今でしょ」「倍返し」「おもてなし」「じえじえじえ」。五十年前も流行語がたくさん生まれた年だったんだ。

亜希　そうなんだ。

富士雄　「あつたり前田のクラッカー」とか「俺についてこい」とか。(あー)「シェー」もこの年に生まれたんだ。

マリ　「シェー」って。

富士雄　『おそ松くん』って漫画の登場人物のイヤミが驚いた時にこんなポーズをして言う言葉。

マリ　あー、それ知ってる。

富士雄　最後にもう一つ。これってちょっと悲しい繋がりなんだけど。五十年前にテレビ放送が始まったアトムなんだけど、妹のウランと二人、五十年後の今、ちょっと肩身が狭い思いをしているんだ。

亜希　どうして？

富士雄　二人のエネルギーって、原子力だろう。ほら、原発のことがあるじゃないか。

亜希　あー、放射能汚染とか。

マリ　五十年前の人達も、震災と原発事故までは予想できなかったね。

富士雄　そして、それとアトムとウランが繋がることも。

亜希　…繋がるのか？

富士雄　(えっ)

亜希　この前ニュースでやってたんだけど、今世界中でロボットが作られてるんだって。マリ、それってどん

なロボットだと思う？

マリ えっ？ えっとー…

亜希 戦争で人間のかわりに戦うためのロボットなんだって。

マリ それってアトムと反対だね。

亜希 富士雄、アトムのエネルギーが原子力じゃなくなったら、アトムじゃなくなるのかな？

富士雄 アトムって原子って意味だからアトムのエネルギーは…

亜希 原子力エネルギーじゃなくちゃダメなの？太陽エネルギーで動いたら、アトムはアトムじゃなくなるの？

富士雄 …

亜希 どんなエネルギーで動いても、アトムはアトムだよ。原発の事故と繋がるなんてかわいそうだよ。あの事故の時にアトムがいたら、アトムってまっ先にそこに行ったんじゃないかな。ウランと一緒に。

富士雄 そっか…

亜希 それがアトムとウランなんじゃない。

富士雄 もし今、手塚治虫が生きてたら、またアトムを描き始めたかもしれないね。震災の時、人間を必死で助けるアトム。原発の事故と闘うアトム。

亜希 そして、ウラン。

マリ なんかもいいね、その話

亜希 ねっ、ちょっと休憩しよっか。

マリ 賛成。

富士雄が教室から出ていく。

そこに村上晴美が入ってくる。

晴美 亜希。大発見、大発見。

亜希 いったいどうしたの？

晴美 それが…校長室の空き缶の中に入ってた、昔の写真整理してたら、そこに…

亜希 そこに？

晴美 (写真の裏を見せる) ここ、読んでみて。

亜希 昭和三八年度生徒会…ってことは

晴美 きっとこれ、この学校が生まれた時の生徒会の写真なんだよ。で、この写真…

そう言って晴美は笑い出す。



マリ　じれったいな、いったいどんな写真なの？  
晴美　それじゃ今からこの写真を見せます。はい。

そう言って写真を見せる。

マリ　(笑い出す)うそー、何これ、

三人がおなかを抱えて笑い出す。

亜希　あーだめだ、涙が出てきちゃった。  
マリ　私、涙がこぼれちゃいそう。

三人は笑いすぎたために出てくる涙をぬぐいながら、上を向いて歩き出す。  
五十年前にアメリカで大ヒットした『上を向いて歩こう』(歌・坂本九。アメリカ版のタイトルは『SUKIYAKI』) I N。

暗転

☆昭和 38 年 (1963 年) 12 月 4 日(水) 15:30

舞台が明るくなる。  
そこは昭和三八年(一九六三年)の生徒会室。  
窓辺に慎司が立っている。  
慎司は曇ったガラスに何かを書いている。  
そこに千夏が入ってくる。  
慎司が慌てて書いたものを消す。

千夏　(わー)窓、全部曇ってるね。慎司、何書いていたの？  
慎司　(あー)何でもない…  
千夏　慎司、昨日の『アトム西部に行く』ってタイムマシンの話だったね。なんかわくわくしちゃった。慎司はテレビより先に、アトムがタイムマシンで過去に行く話、書いてるぞって。  
慎司　そっか、タイムマシンの話だったのか。  
千夏　あれ、慎司昨日の『アトム』見なかったの、あんなに好きだったのに。  
慎司　…

千夏 『アトム』、完成した？  
慎司 (首を振る) 書けたのは、ラストシーンの前まで。でも…  
千夏 でも？  
慎司 わからないんだ、これでもいいのか…  
千夏 読ませてくれる？  
慎司 …

慎司はカバンから台本を出して千夏に渡す。

慎司 あー、俺ちよっと用があるから。

そう言って慎司は教室を出ていく。

千夏が台本を読み始める。

しばらくして正太郎が教室に入ってくる。

正太郎は、窓に近づき、曇ったガラスを手で拭いて外を眺める。

千夏が台本をとじる。

千夏 天気予報では、雪になるって言ってたよ。

正太郎 (息で手を温めて) どうりで寒いはずだ。

千夏 慎司、何かあったのかな？

正太郎 どうして？

千夏 この前台本見せてくれたの、一か月も前だったじゃない。あの時はあんなに楽しそうに台本書いてたのに、あれからは台本のこと聞いても、ずっと「もうちょっと待って」って言って、見せてくれなかったんだ。本番までに劇の練習しなくちゃいけないから、書いたところまででいいから見せてって、昨日、かなりしつこく頼んだんだ。そしたら、これ、今日見せてくれたんだけど…

正太郎 見せてくれたんだけど、何？

千夏 台本にウランちゃん出てこないんだ。この前サッチちゃんに頼まれたじゃない。ウランちゃんを出してって。慎司、ウランちゃん出すことサッチちゃんと約束したのに、ウランちゃん出てこないんだ。

正太郎 大ちゃんならわかるんじゃないかな、慎司の気持ち。

千夏 大作はわかるわけじゃないじゃない。

正太郎 僕はおかと思う。

千夏 どうして？

正太郎 慎司、何で科学部やめて野球部に入ったか知ってる？

千夏 慎司は大作とエースの座を争うためだって言ってたけど、そうじゃなかったの？

正太郎 あれ、本当は大ちゃんの球を捕るためだったんだ。

千夏 慎司がそう言ったの？

正太郎 僕が初めてそう思ってるだけ。でも、きっとそうだよ。だって大ちゃんの球を捕れるの慎司だけだったから。

千夏 でも慎司、「大作の球だけは捕りたくない」って言ってたよね。

正太郎 あれは嘘。慎司は照れ屋だから、大ちゃんの球を捕るために野球部に入ってたなんて言えないんだ。大ちゃんも、本当はそんな慎司のことわかってるんだ。あの二人が言い合いするのは、いつも勝った試合の後なんだよ。「お前のせいで、もう少しで負けるところだった」とか言って。でも、県大会の決勝戦の後は違ったんだ。

千夏 (あー)最後、大作が大暴投してサヨナラ負けしちゃった試合。

正太郎 あの時、慎司は大ちゃんのこと全然責めなかった。そんな慎司に、大ちゃんが言ったんだ「何でもみたくて俺のこと責めないんだよ」って。

千夏 慎司何て言ったの？

正太郎 「ぼーか、こんな時、お前を責めても面白くもなんともないんだよ」って。

千夏 そうなんだ。

正太郎 大ちゃん、すっごく泣いちゃって。あれ、悔し涙じゃなかったんじゃないかな。あの後も二人は何度も悪口の言い合いしてるし、意見もいつも対立してるけど、僕、わかったことがあるんだ。大ちゃんが、慎司の意見に反対する時って、自分が反対してもなんにも変わらない時なんだ。あれ、本当は賛成なんだよ。

千夏 …そう言われてみれば、正太郎、読みが深いね。

正太郎 あの二人は僕にとって特別な存在なんだ。千夏、覚えてるだろ、小学校の頃、僕がいじめられっ子だったこと。

千夏 (あー)そう言えば、正太郎、泣き虫正ちゃんって呼ばれてたよね。

正太郎 …

千夏 (あつ)ごめん。

正太郎 いいよ、本当のことだから。そんな僕がいじめられなくなったの、あの二人と一緒にいるようになったからなんだ。へたっぴの僕の野球の練習にもつきあってくれたんで、レギュラーにもなれたし。

千夏 それで、あの二人と一緒に生徒会の役員にもなっちゃったってこと？

正太郎 全然役に立たない、生徒会役員だけど。

そこに慎司が戻ってくる。

千夏 ありがと(う)。

千夏はそう言って台本を慎司に渡す。

千夏 聞かぬんだ。どうだったって。

慎司 ウラン、出せなかった。

千夏 そうみたいだね。

慎司 サッちゃんに何て言えばいいかな？

千夏 どうしてウランちゃん出せなかったの？

慎司 …戦争のこと、考えちゃうんだ。

千夏 戦争？

慎司 戦争で、広島に原子爆弾が落とされたろ。たくさんの人が死んだよね。

千夏 (うん)

慎司 あの原子爆弾にウランが使われてたんだ。

千夏 そうなの？

慎司 俺、この夏、家族で広島平和記念資料館に行ったんだ。そこで原爆で滅茶滅茶になった町の写真を見た。原爆で死んだたくさんの方の写真を見た。ウランのこと書こうって思うと、どうしてもあの時見た写真を思い出しちゃうんだ。

千夏 そっか、それでウランちゃん出てこなかったんだ。

そこに大作と佐知子が入ってくる。

佐知子 千夏おねえちゃん、昨日もアトムありがとう。

千夏 楽しかったね、昨日の『アトム西部に行く』。

佐知子 うん、でもタイムマシンに乗ったの、アトムとお茶の水博士とヒゲおやじだったでしょ。サチ、ウランちゃんにも一緒に乗ってもらいたかった。

千夏 そっか。

佐知子 サチ、ウランちゃんだーい好き。

佐知子がアトムのテーマをハミングで歌いながら曇ったガラスに絵を描き出す。

千夏 (ふーん) サッちゃん、ウランちゃんだね。上手だね。

佐知子 はい、できあがり。

千夏 ウランちゃん、とっても楽しそうだね。

佐知子 (あつ)慎司こいちゃん。慎司こいちゃんのお話でも、アトムがタイムマシンに乗るんでしょ？

慎司 …うん。

佐知子 慎司こいちゃんのお話では、タイムマシンにウランちゃんも一緒に乗せてね。

慎司 (えっ…)

佐知子 ねっ、お願い。

慎司 サッちゃん、ごめん。俺の台本にウランちゃん、出せないんだ。

佐知子 どうして？

慎司 どうしてって…

佐知子 どうしてウランちゃん、出せないの？

慎司 広島でたくさんの人が爆弾で死んだんだ。

佐知子 それ、ウランちゃんと関係があるの？

慎司 …

佐知子 ねえ、慎司こいちゃん。

慎司 その爆弾に使われたのが…ウランだったんだ。だから…

佐知子 (怒って)慎司こいちゃん、ウランちゃんは人を殺したりしないよ。

慎司 ウランちゃんは殺さないけど、ウランは殺したんだよ。戦争で爆弾に使われてたくさんの人が死んだんだ。

佐知子 バカ！慎司こいちゃんのバカ！

慎司 …

佐知子 ウランちゃんは、爆弾なんかじゃないよ。人を殺したりしないよ。

千夏 サッちゃん。

佐知子 サチ、爆弾のことよく知らないけど、もし、アトムとウランちゃんが戦争の時生まれていたら、(そう言って泣けてくる)

慎司 …

佐知子 もし戦争の時に生まれてたら、たくさんの人を助けたよ。どこかに爆弾が落ちたら、そこに助けに行ってたよ。絶対に助けに行ってたよ。

慎司 …

佐知子 慎司こいちゃん。ウランちゃんは人を殺したりしないよね。ねー、殺したりしないよね。

慎司 サッちゃん…

佐知子 殺したりしないって言ってよ。助けに行くって言ってよ。

佐知子は泣く。

慎司 千夏、俺…どうしたら…

千夏 慎司…

大作 サチ！ウランのことはあきらめろ。さっ帰るぞ。

慎司 大作…

大作 …

慎司 どうしたんだよ、大作。何で「妹を泣かすな」って俺のこと責めないんだよ。

大作 ばーか。今、お前を責めてもちっとも面白くねーよ。

慎司 千夏、俺どうしちゃったんだろ。前はこうじゃなかった気がする。アトムを創ることが夢だった頃までも、広島での写真見て、これが科学なのかなって思った時、アトムを創ることが怖くなっちゃったんだ。アトムが生まれたら、アトムに悪い心が宿って、原爆みたいに戦争に使われちゃうんじゃないかって。

千夏 優しすぎるんだよ。

慎司 …

千夏 優しいから、ウランちゃんを劇に出すことで原爆の被害にあった人のことまで考えちゃう。だからいつも苦しむんだよ、アトムみたいに。

慎司 アトムみたいに？

千夏 正しいこととしても誤解されたり、誰かに優しくすることで他の誰かを傷つけたり。それで、いつも傷ついて、悲しい思いもたくさんして。アトムも慎司も優しすぎるんだよ。

慎司 …

千夏 だから、私

慎司 …

千夏 そんな慎司に、アトム創ってほしい。

慎司 ！

千夏 慎司なら創れるよ、だって慎司、七つ森東中学校始まって以来の秀才じゃない。

慎司 始まって以来って、この学校、今年始まったんだぞ。

千夏 でも嘘言っていないよ。それにかっこよくない、この学校始まって以来の秀才って。

正太郎が拍手する。

慎司 正太郎…

千夏 慎司が創るアトムに悪い心が宿るはずないよ。戦争に使われるはずないよ。

慎司が大きく息を吐き窓辺に歩いていく。

そして、しばらく空を眺める。

ずっと話を聞いていた佐知子が慎司のところに歩いていき、慎司の袖を引っ張る。

佐知子 慎司こいちゃん。

大作 おい、サチ。

千夏 サッチちゃん。

佐知子 ごめんなさい。

大作・千夏 ！

慎司 サッチちゃん…

大作 サチ、ウラン、あきらめたのか？

佐知子 (…うなずく)

大作 よーし、サチ、よくあきらめたな。さっ、帰るぞ。

佐知子 うん。

大作と佐知子が帰りだす。

慎司 待てよ！

大作・佐知子 …

慎司 サッチちゃん、

佐知子 …

慎司 ウランちゃん登場するよ。

佐知子 えっ？

慎司 この台本にウランちゃん登場するよ。

佐知子 ほんと？

慎司 (うなずく)

千夏 慎司、台本創り直すの？

慎司 ウランちゃんが登場するのは、これから書くところさ。

千夏 それって、

慎司 ラストシーン。サッチちゃんの言うとおりでしょ。もし、戦争の時アトムとウランちゃんがいいたら、二人とも、戦場に行ったよ。そして、たくさんの人を助けたよ。

佐知子 ウランちゃん、悪くないの？

慎司 悪いはずないじゃないか。だってウランちゃんはアトムの妹、アトムと同じ心優しい科学の子だろ。

佐知子 うん。ねっ、慎司こいちゃん。五十年後、本当にアトムって生まれるの？

慎司 (しばらく考えて)生まれるよ。

千夏・大作・正太郎　　！

慎司　だって俺が創るから。俺がアトム、創るから。

千夏　それでは質問です、五十年後にアトムが生まれると思う人。

佐知子　はい。（と元氣よく手を挙げる）

千夏が挙げ、正太郎が挙げ、慎司がゆっくり手を挙げる。

大作だけ手を挙げない。

千夏　あれ、大作は？

大作　へん、慎司が創るんじゃない無理だな、ぜってー無理。

千夏　それじゃ、みんなアトムが生まれることに賛成ね。

大作　おい千夏、何言ってるんだよ。俺は反対だって。

千夏　ってことは賛成なんですよ。ねっ、正太郎。

正太郎　そういうことだね。

大作　おい、正太郎まで何だよ。

佐知子が笑い出す。

大作　泣いたカラスがもう笑ってら。

佐知子　サチ、カラスじゃないよ。

大作　（千夏達こ）じゃあな。サチ、帰るぞ。正太郎、俺についてこい。

正太郎　（あっ）大ちゃん、待って、待ってよ。

大作と正太郎と佐知子が帰っていく。

千夏が帰る支度を始める。

慎司は佐知子が窓に描いたウランの絵を見ている。

千夏　サッチちゃんが描いたウランちゃん、笑ってるね。

慎司　（うん）笑ってる。

慎司が帰る支度を始める。

その時、ウランの目から滴が垂れる。



千夏 あれ？

慎司が千夏を見る。

千夏 見て。(そう言って佐知子の描いたウランちゃんを指さす)

慎司 (千夏が指さしたウランちゃんを見る)

千夏 ウランちゃん目から滴が。

慎司 …

千夏 なんか、涙みたいだね。ウランちゃんの。

慎司 どんな涙かな？

千夏 決まってるじゃない。

慎司 (千夏を見る)

千夏 うれし涙だよ。うれし涙

慎司 …そっか。

千夏 (そう言って窓辺に近づき、曇ったガラスを手で拭く) 慎司、

慎司 …

千夏 雪、雪だよ。

慎司 (慎司もそこから外をのぞいて) ほんとだ。

二人は雪を見ている。

暗転

